

寒くなりましたね。皆様、お変わりありませんか？平成29年もあと僅かになりました。あんなこと、こんなこと。いろいろあった一年でしたが、新しい年をみんな笑顔で迎えたいですね。新年は戌年。きっと“ここ掘れ。ワンワン！”皆様それぞれの宝物が見つかりますように。それでは会報をお届けいたします。(千)



☆活動報告と活動予定

日程	内容
H29年7月末	「語り継ぐ長岡の伝説」出版 500部完売のため、8月末200部増刷
H29年8月22日・23日	第12回長岡民話百物語 於：アオーレ長岡 来場者数：443名
H29年8月26日	百物語反省会・伝説集出版記念会 於：アトリウム長岡
H29年10月28日	第2回伝説の地めぐり研修旅行
H30年1月27日	例会：13:00～ 新年会：14:00～ 会場：アトリウム長岡 会費：5,000円 申込〆切：1月10日 幹事当番：3班



お知らせ

8月22日の百物語当日の朝、前日21日に田辺さんがお亡くなりになられたとお聞きし言葉を失いました。

思えば、市政百周年に掛けて百物語をやってみようと思案されたのは田辺さんでした。伝説集を作ろうと私達の背中を押してくれたのも田辺さんでした。

広く優しいお心と、民俗学に対する深い造詣に裏打ちされた、びっくりするほどの知識でどんな質問にも、いつもしっかりお答えいただき、民話の会の土台を作って下さいました。感謝の気持ちでいっぱいです。田辺さんの思いを絶やすことのないように、民話の会を続けていかななくてはと思います。

心よりご冥福をお祈り致します。





匂いの代金

高橋 実

むかしあるまちにたいそうケチな男が住んでいた。飯を食うにも梅干をじっと見ていて、すっぱい唾が出てきたら急いでご飯をかき込む具合だったと。ところが毎日毎日梅干しばかり見ているものだからそろそろ飽きがきて、たまには変わったもんで飯が食いたくなかったと。あるとき何かいいもんがないかと町をあるいていると、向こうからぷーんといいい匂いがしてきた。うなぎやが店先でウナギの蒲焼をやいてあったと。男は急いで家にもどると、その店先でにおいを嗅ぎながら飯を食いだしたと。これを見ていたうなぎ屋の主人が「お客様代金をいただきます」といったが、男は「わしはウナギを食うておらん匂いを嗅いだだけだ」というと、主人は「ですからその匂いの代金をいただきます」という。こちらもたいしたけちぶりだ。「よしわかった。そこまでいわれて払わなかったら、この男がすたるといふものだ。払いましょう」と言って財布を取り出した。財布をとりだして、小銭をチャリンチャリンといわせて、「おやじ匂いの代金は音で支払ったぞ」というた。

(フジパン 東京都の昔話) から)

この話の面白い所は匂いの代金を請求するという店のオーナーの理不尽な要求に代金をお金の音で支払うという。無理な要求に決して怒らない。その要求に同じ手法で反撃する場面である。これが昔話のポイントである。

そこで思い出されるのは、一休さんの頓智話である。一休宗純(いっきゅうそうじゆん)は、室町時代の臨済宗大徳寺派の僧である。

一休さんの頓智の評判を聞いて、殿様がお城に一休さんを招き入れた。殿様は屏風の虎が夜中に抜け出して、悪いことばかりするので、その虎を縛り上げてほしいと頼む。さすがの一休もそれはできないで降参するだろうと、試そうとしたのである。すると、屏風の虎が出てくるなんて、うそに決まっていると思っても、一休の頓智を試そうとしたのである。一休は決してひるまず、縛るには縄が必要だと縄を要求する。縄を受けとった一休はにじり鉢巻をして、「それでは」と声をかけて、一休さんは殿さまに頼みこむ。「トラを屏風から追い出してください」。殿様は、屏風の虎を追い出せることができず、一休さんは追い出せない虎を縛ることができないといい、殿様に頓智で勝つことができたという話である。(福娘童話集 えとのおはなし)

相手の理不尽な要求には、ことばという頓智やウエットで反撃する。昔話にはこうした小噺がある。短くてもきりりと辛子が効いた咄。権力に金や力のないものが言葉という見えない力で反撃する。昔話にはこうした一面があるために人々に受け継がれてきたに違いない。こうした話を他でもぜひ教えてほしい。

さあ！トラを追い出してください！





新米語り部のごったくな話

本山 福美

【昔話との出会い】

昔あったてんがの。あるところにとつつあとおっかあと3人の子どもの家があったと。冬になると、ここんちの2番目の子は、朝は寒いんだが、とつつあの布団の中に潜り込んで昔話を聞いていたんだと。とつつあの語りは、そんげに上手でもなかったども、昔話の面白さにひかれて聞いていたんだと。「銭をこく馬」、「猿の生きぎも」、「軽業どんと神主どんと医者どん」などは、「あるわけなえ。欲深けなあ。」と言いながらも楽しんでいたと。これがオラと昔話の出会いだった。

【昔話との再会・入会】

あるコンサートのプログラムの一つに昔話の語りがあった。その語りは想像力を掻き立て、話が生き生きと伝わってきて圧倒された。これが、昔話の良さを再認識させられた出会いであった。その後、長岡新聞で夜語りしている長岡民話の会の記事に触れたり、まちキャンでの「怖い昔話」を聞いたりしてますます惹かれていった。思い切って事務局に連絡し、取り敢えず例会に参加した。会員の方々が真摯に取り組み、顧問の先生方から専門的なお話があり、とても重厚な会だった。恐る恐る例会に数回参加した後、正式に入会した。

【長岡民話百物語デビュー】

当日は、心ここにあらずの状態でお番を待った。いざ、舞台上になると、照明が舞台を照らすので観客席の前列の方は見えるが、後列は暗くてよく見えないので落ち着くことができた。いつもの調子で語るようにと自分に言い聞かせ、どうにか可もなく不可もなく語り終えた。自分の語りの内容についての検証をしなかったが、それに応えてくれたのがアンケート結果と長谷川企画の録画であった。アンケート結果からは、「レジェンドの語りは違うな」、「若い人より年配者の方が聞きやすかった」、「語り部の上体がよく動くのが気になった」という記述があった。購入した長岡民話百物語のDVDを再生してみると、この感想に納得せざるを得ない。私は、体をやたらと左右に動かしていた。私ほど体を動かしている者はいなかった。自信をもって語れていない証拠であり、恥ずかしい限りである。先輩たちの語りは、心が和む口調でゆったりとした雰囲気の中に観客を巻き込んでいる。その点、自分の語りは一言でいうと「青い」のである。語り口調にぎこちなさがあり、話の面白さが観客の耳に心地よく届かないのである。今後は、自分の癖に気を付けて、聞きやすい語り方が語れるように先輩たちの語りを参考にしたい。

最後に、「長岡民話百物語」を開催するには、会員のご家族の方のご協力があったと言っても過言ではない。舞台の設置や後片付け、道具の搬出入等を惜しみなく協力してくださったお陰で舞台上に立ち、語る事ができたのである。ご自分の仕事をやり繰りされてご協力くださったご家族の皆様にお礼を申し上げたい。また、ほぼ全県から「民話の会の団体」の方々も語ってくださったことにもお礼を申し上げたい。語りを通して、人や昔話の輪や交流が広がっていくことも嬉しいことである。さらに、私のような新米が3話も語ったにもかかわらず、足を運んでくださり、温かい応援のメッセージを届けてくださった観客の皆様にも感謝したい。このような多くの方の温かいご支援に支えられて、今回を迎えられたことを肝に銘じておきたい。



「第二回伝説の地めぐり」に参加して

田島 明美

“どうか孫が熱を出しませんように”その願いが叶い！！やっと二回目の旅行に参加できました。最初に訪れた戸田名兵衛の碑では奥様がお話して下さり、一人で守り続けていることに感服いたしました。乳銀杏もいつも東山へ行く道なのに知らずにおりました。乳母の峰子が持って来た杖を亡き皇子のために立て乳をしぼって供養したこと。村の女達も乳の出がよくなるようにと石仏を祀って祈ったこと。いつの世も変わらぬ女達の切ない願いが受け継がれているのだと思いながら大木を見上げました。側らの十月桜が可憐でした。

妙龍神社では、長年太田地区の歴史を研究されている小高さんのほか、何と孫兵工家の子孫の小幡さんもお越しになり、お話を聞くことができました。全国一の宮の碑や富士塚も案内して頂き、道路拡張工事の前に石段を登り、お詣りできたのは幸いでした。

三味線石を経て木沢では星野さんのお人柄溢れるお話の数々。愛宕地蔵から遠く権現堂の弥三郎ばさの話まで。とりわけ坊塚の由来は恐ろしくも土地の人々の愛着を感じるものでした。

待望の昼食は、「東忠」。ここでも河井継之助が小千谷会談の後に食事をした部屋を見ることができ、継之助の無念に思いを馳せたひと時でした。(勿論、美味しかったで一す。)

その後、高橋先生から小国地区のお話を伺い、北越鉄道が開通して初めて汽車を見た人達の驚きをお聞きしたり、先生がよく使われた塚山駅を眺めながら朝日寺(ちょうじつじ)へ。ご住職から田搔観音の由来をお聞きし、泥のついた御御足の観音様を拝みました。外に出ると空気がひんやりとして清々しく晩秋の古刹の風情でした。

途中、幹事さんから差し入れのコーヒーにほっと和み、浦の五つ塚地蔵をお詣りして帰路に着きました。

今は、ナビゲーション(通称:ナビ)を使って史跡をめぐることも、インターネットで謂われを調べることもできるでしょう。本当に楽しく面白く、クセになりそうです。

“いや～辞めらんねえてえ～民話の会”。

<あとがき>

昔。囲炉裏のまわりや寝床で語られてきた昔話。年寄りから子供達へ語られた言い伝え。それが難しい環境になっている今、私達の代で途絶えさせてはいけないなど、強く感じた旅でした。



発行者：長岡民話の会

連絡先：0258(22)1866(今井)